

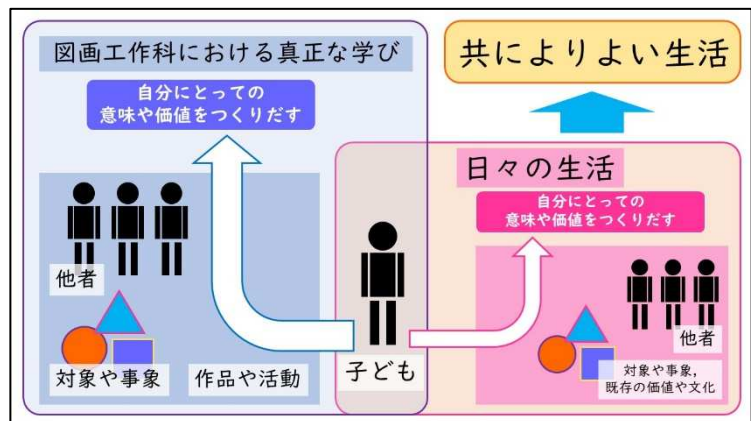
図 画 工 作 科

図画工作科部 大塚 裕貴 貞永 瞳
研究協力者 郡司 明子

I 図画工作科における「真正な学び」について

対象や事象を造形的な視点で捉え、感覚や行為を通して、自分にとっての意味や価値をつくりだす学び

本校では、「共によりよい生活を創造する子ども」の育成を目指している。「共によりよい生活を創造する子ども」の育成をするためには、図画工作科を学ぶ本質的な意義である「対象や事象を造形的な視点で捉え、感覚や行為を通して、自分にとっての意味や価値をつくりだすこと」が欠かせない。子どもたちが、造形活動に取り組む際には、身の回りの様々な対象や事象の形や色を基に、自分の感覚や行為を通して、自分にとっての意味や価値をつくりだしていく。そして、既存の価値や文化、日々の生活や、自分を取り巻く社会や世界に対しても、自分にとっての意味や価値を見いだすことができるとともに、豊かな情操が育まれ、共によりよく生きていくことができる生活を創造していくことができる。(図1)



<図1 図画工作科における共によりよい生活を創造する子どものイメージ>

本校図画工作科では、この本質的な意義を基に、図画工作科における真正な学びを「**対象や事象を造形的な視点で捉え、感覚や行為を通して、自分にとっての意味や価値をつくりだす学び**」とした。図画工作科の問題解決的な学習において、子どもたちは、対象や事象と出会い、造形的な視点を見いだす。そして、自分のイメージを広げたり、思いをもったりして、自己の造形的な課題を設定する。次に、造形的な課題の達成に向けて、対象や事象と関わり、さらにイメージを広げたり、思いをもったりして、自己の造形活動に取り組む。そして、自己の造形活動の過程を振り返り、自分にとっての意味や価値を自覚する。図画工作科における真正な学びである「**対象や事象を造形的な視点で捉え、感覚や行為を通して、自分にとっての意味や価値をつくりだす学び**」を繰り返し行うことで、子どもが日々の生活でも造形的な視点を働かせながら、意味や価値をつくりだすことにつながり、図画工作科を学ぶ本質的な意義に迫ることができると考えた。

これらのことから、図画工作科における真正な学び「**対象や事象を造形的な視点で捉え、感覚や行為を通して、自分にとっての意味や価値をつくりだす学び**」を通して、「共によりよい生活を創造する子ども」を育成することとした。

2 研究の方向

昨年度、本校では、問題解決的な学習において、真正な学びのデザインを行ってきた。実践を行う中で、次のような課題となる姿が見られた。自分の造形活動に充足した後や行き詰った後に、自己の作品や活動への取組に消極的な姿である。このような子どもたちは、「対象や事象の形や色を基に、自分にと

っての意味や価値をつくりだすこと」に迫ることが難しかった。

このような課題となる姿の要因を、以下のように分析した。

課題となる姿	その姿の要因
自分の造形活動に充足した後や行き詰った後に、自己の作品や活動への取組に消極的な姿	・【であう過程】において、造形的な課題をつかむ際に、自己のイメージや思いのみに固執し、新たなイメージを得ようとする意識が不十分である。 ・【あらわす・ひろげる過程】において、自己の作品や活動に対するよさや美しさに気付けなかったり、他者の作品や活動、参考作品からよさや美しさを得ようとしたりする意識が不十分である。

図画工作科を学ぶ中では、自分のイメージを広げたり、思いをもったりして、自己の造形的な課題を設定し、達成に向けて対象や事象と繰り返し関わり続けるという「目標への情熱」が必要である。また、自己の造形活動の達成に向けて、自己の作品や活動をよりよくするために、自他の作品や活動からよさや美しさを感じ取りながら、造形活動に取り組むという「粘り強さ」が必要である。

そこで、本年次は、「共によりよい生活を創造する子ども」の育成を目指し、真正な学びの中で、「目標への情熱」や「粘り強さ」を発揮する姿がさらに現れるように、研究を進めていくこととした。

3 研究内容

(1) 「目標への情熱」と「粘り強さ」が発揮された姿

図画工作科では、問題解決的な学習における子どもの「自己の造形的な課題の達成」を目標とする。

図画工作科で想定した「目標への情熱」や「粘り強さ」が発揮された姿は以下のとおりである。

目標への情熱が発揮された姿

自己の造形的な課題の達成に向けて、自己のイメージや思いを基に対象や事象に関わり、活動に黙々と取り組んだり、自分の作品や活動を注視したりして、作品や活動をつくり続ける姿

粘り強さが発揮された姿

活動がとまった際に、他者の作品や活動を覗き込む姿、自他の作品や活動のよさや美しさに関する発言をする姿

(2) 学びのプロセス

過程	学習活動	学びのプロセス
であう	対象や事象と出会い、イメージを広げたり、思いをもったりして、自己の造形的な課題をつかむ	対象や事象と関わることへの期待の高まり
あらわす・ひろげる	対象や事象と繰り返し関わったり、自他のイメージや思い、作品や活動を比較したりする  自己のイメージを広げたり、思いをもったりして、造形活動に取り組む	対象や事象と関わることへの期待の高まり 他者と関わろうとする意識の高まり
ふりかえる	自己の造形的な課題を達成する 自分の作品や、活動の過程を振り返り、つくりだしてきた自分にとっての意味や価値を自覚する	自分にとっての意味や価値の自覚

(3) 真正な学びのデザイン

本校図画工作科では、問題解決的な学習において、「目標への情熱」と「粘り強さ」の視点から、真正な学びのデザインを行う。

①図画工作科の本質的な意義に迫る学び

図画工作科における真正な学びに向けて、教師と子どもたちが図画工作科を学ぶよさを考える機会を設定する。この機会では、これまで学んできた題材を通して、子どもが自分に身に付いたと思う力を問いかけ、図画工作科を学ぶよさを考える。また、造形的な見方・考え方を働かせ、自分なりの意味や価値を見いだすことの楽しさや面白さを話し合う。子どもには、『形・色アンテナ』を高くしたり、増やしたりして世界を楽しむなどの理解しやすい表現で共有する。(図2)



＜図2 図画工作科を学ぶよさを子どもと共有する際の板書例＞

②「目標への情熱」と「粘り強さ」の視点からの、真正な学びのデザイン

図画工作科における真正な学びに向けて、「対象や事象へのイメージを共有する機会」、「気付いたことや次時に取り組みたいことを記録する機会」、「互いの造形活動を自由に見合える環境」を設定する。

過程	学習活動	学びのプロセス	学びのデザイン
であう	対象や事象と出会い、イメージを広げたり、思いをもったりして、自己の造形的な課題をもつ	対象や事象と関わることへの期待の高まり	対象や事象へのイメージを共有する機会 気付いたことや次時に取り組みたいことを記録する機会
あらわす・ひろげる	対象や事象と繰り返し関わったり、自他のイメージや思い、作品や活動を比較したりする 自己のイメージを広げたり、思いをもったりして、造形活動に取り組む	対象や事象と関わることへの期待の高まり 他者と関わろうとする意識の高まり	気付いたことや次時に取り組みたいことを記録する機会 互いの造形活動を自由に見合える環境

対象や事象へのイメージを共有する機会

【であう過程】において、子どもが、イメージや思いの共有を通して、自他のイメージや思いの共通点や相違点を感じ取り、自分にはなかった新たなイメージに気付いたり、対象や事象との多様な関わり方を想起させたりして、対象や事象と関わることへの期待を高められるように設定する。この機会では、教師による形や色、イメージなどに関する問いかけや参考作品の提示、対象や事象との試しの関わり方の設定などを行い、題材によってはこれらを組み合わせて行う。この機会の設定では、造形的な視点で捉えた際に多様な価値が生まれるような、問いかけや参考作品、試しの関わりなどを設定する。また、対象や事象との試しの関わりを通して、イメージや思いを共有する際には、他者と直接伝え合う方法やICT機器を用いてアプリ上で共有する方法がある。ICT機器を用いて、参考作品の画像をアプリ上で提

示した場合には、考えたことや気付いたことを文章で記述したり、画像に書き込んだりしたものを共有する。対象や事象と試しを行いながら共有する場合には、子ども同士が直接、話し合いながらイメージを共有するよう促す。この機会の設定は、対象や事象と関わることへの期待の高まりという「目標への情熱」の発揮につながる。

気付いたことや次時に取り組みたいことを記録する機会

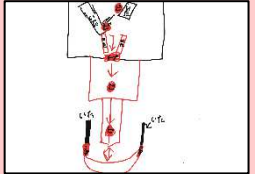
【であう過程】、【あらわす・ひろげる過程】において、子どもが造形活動を通して、自分がつくりだした気付いたことや取り組みたいことを授業の中で振り返ることができるように設定する。この機会は授業の後半に5分から10分程度の時間で設定し、本時で気付いたことや感じたこと、次時に取り組みたいことを文章で記述したものと、自分の作品や活動を撮影した画像の2つを合わせてアプリ上に提出する。提出した記録シートはアプリ上で共有して他者の振り返りを見ることができたり、必要に応じて教師が共有し、紹介したりする。造形活動を基に気付いたことや感じたことを振り返ることは、自己の造形的な課題の達成に対して、現段階での達成具合や達成に向けて不足していることを自覚することや自己の活動を見通すことにつながる。この機会の設定は、対象や事象と関わることへの期待の高まりという「目標への情熱」の発揮につながる。

互いの造形活動を自由に見合える環境

【あらわす・ひろげる過程】において、子どもが自分では気付けなかった作品や活動のよさや美しさに気付けるように、他者の作品や活動を見たり、他者と関わったりできる環境を設定する。環境を設定する際には、子どもが他者の作品や活動が見たいと思ったときや気になったときに、出歩いて鑑賞したり、作品や活動について話し合ったりしてもよいという意識を共有したり、活動する際の座席やグループ、材料や用具置き場などの位置を構成したりする。教師は、授業の中で適宜、鑑賞を促すこともある。この環境の設定は、他者との関わりを通して、自己の作品や活動をよりよくするために、他者と関わろうとする意識の高まりという「粘り強さ」の発揮につながる。

このような学びは図画工作科を学ぶ本質的な意義に迫るとともに真正な学びを考慮している。

4年「ころがれ どこまでも（工作に表す）」

過程	学びのプロセス	学びのデザイン
であう	対象や事象と関わることへの期待の高まり - どんな物を使ったら、どんな転がり方になるのだろう。 - もっと勢いよく転がしたり、速く転がしたりしたいな。 ↓ - 机を傾けると転がる速さが変わりそうだな。 - もう少し机を傾けてみよう。 - 友だちはビー玉が転がる道に出っ張りをつくっていたよ。こうすると転がった勢いで、ビー玉が跳ねて面白いな。 - 私はビー玉の勢いを使って跳ねる仕組みをつくりたいな。	ビー玉が転がるという事象を基に他者と転がり方のイメージやつくりたい仕組みへの思いを共有する機会 ビー玉が転がるという事象を基に、教室内の物を使って、ビー玉が転がる速さ、向きなどの転がり方を試し、自他の転がり方のイメージやつくりたい仕組みへの思いを共有する。 
		気付いたことや次時に取り組みたいことを記録する機会 試しの関わりを記録した動画とアイデアスケッチ  

あらわす・ひろげる	対象や事象と関わることへの期待の高まり ・今日はどんなことに取り組もうかな。	互いの製作している仕組みを基に ビー玉の転がり方を見合える環境 自己の造形活動に対する充足や行き詰まりを感じた際に、互いのビー玉が転がる仕組みを、実際にビー玉を転がしながら鑑賞する。他者の製作した仕組みから自己の仕組みに生かせそうな転がり方に関わる工夫を見いだす。 	気付いたことや知時に 取り組みたいことを 記録する機会 子どもの振り返り (上段が前時、下段が本時) 今回できた事は、坂道を作って、紙ボウルに穴を開けた事です。だけど、転がってくるビー玉が、早すぎていたので、ここをかいぜんしたいです。 今日は、ビー玉が他のところに飛んでいかないように、トイレットペーパーのしんで周りをかこったりして工夫しました。他にも、ガムテープで本体がたおれないようにしたり、しんを半分に切ったりしました。次回は4秒にしたいです。 
	他者と関わろうとする意識の高まり ・自分がつくりたい仕組みはほぼ完成したぞ。 ・友だちはどんな作品をつくっているのかな。見てよう。		

4 授業実践 6年「ちょっと未来をのぞいたら（立体に表す）」

(1) 題材の学びのデザイン

本題材に取り組む中で、子どもが針金や粘土などの動きやバランスを、人物の動きの視点で捉え、将来の夢や願いについて自分なりのイメージや思いをもちながら、意味や価値をつくりだせるように次のように題材を構想し、学びのデザインを工夫した。

目標	自分の将来の夢や願いを想像し、材料の加工や着色を工夫しながら、自分なりの思いを込めて立体に表すことを楽しめる。	
過程	時間	学習活動
であう	2	○友達と将来の夢や願いについて話しながら、将来の自分の姿を思い浮かべ、表したい場面のイメージをもつ。
	1	○表したい場面を考え、簡単なアイデアスケッチに表しながら、人物の動きと周りの様子について考える。
あらわす・ひろげる	2	○人物の動きを表す針金の芯をつくり、板の上に固定する。
	2	○板の上に固定した針金の芯に、粘土をつける。
	2	○粘土を絵の具で着色する。
	2	○様々な材料を用いて、人物の周りの様子をつくる。
ふりかえる	1	○作品を見合い、人物の動きや周りの様子の加工や着色の工夫を見付ける。

本題材において、「目標への情熱」と「粘り強さ」が発揮された姿の具体は、以下のとおりである。

目標への情熱 「目標」 <u>自分の表したい将来の夢や願いを表すことの実現に向けて</u>、自己の思いを基に、アイデアスケッチを何度もかくこと、黙々と針金や粘土などの材料に触って動きやバランスを何度も変えることや、加工後に様々な視点で自分の作品や活動を注視すること、針金や粘土の形やバランスから人物の動きを変えることなどを行い続ける姿
粘り強さ 粘土や針金を加工する中で、「どうすればいいのだろう」「うーん」などの行き詰まりに関わる発言や、首をかしげる、不満がある表情をした際に、他者の作品や活動を覗き込む姿、「○○な感じがする」「○○が面白い」など、自他の作品や活動のよさや美しさに関する発言をする姿

なお、本題材において、子どもが「目標への情熱」と「粘り強さ」を発揮できるように、学びのプロセスを想定し、学びのデザインを次のように具体化して行った。

学びのプロセスの具体

過程	学びのプロセス	学びのデザイン
であう	自分の将来の夢や願いを表すことへの期待の高まり ・未来では、技術がすごく進歩していそうだな ・今、習い事で頑張っていることを続けられていたらいいな ↓ ・オリンピックでフィギュアスケートの演技をしているところを針金でつくってみよう ↓ ・針金の芯を固定すると、片足で立つような動きもできそうだな。ビールマンスピンをする様子をアイデアスケッチしてみよう	将来の夢や願いのイメージを共有する機会 気付いたことや次時に取り組みたいことを記録する機会
あらわす・ひろげる	他者と関わろうとする意識の高まり ・針金で人物の動きを表す芯をつくってみたけれど、体のバランスが変だな。どうしたらよいのだろう ↓ ・友達の作品を見てみよう 自分の将来の夢や願いを表すことへの期待の高まり ・前回は人物の動きを針金の芯でつくったけれど、芯だけだと、体がとても細いし、顔の向いている方向もわからないな ↓ ・今日は針金の芯に粘土をつけていこう。粘土をつけると、頭や胴体の向きがわかるから、より人物の動きが伝わりそうだな	表したいイメージや思いを基に、互いの作品や活動を自由に見合える環境 気付いたことや次時に取り組みたいことを記録する機会

(2) 学びの実際 ※G は抽出見, C はその他の子ども, T は教師, は目標への情熱を は粘り強さを発揮した子どもの姿

①【であう】の過程(第1時～第3時)

第1時・第2時, 子どもたちは自分の将来についてイメージを広げ, 針金や粘土を試す活動を行った。教師が「未来」という言葉から想像できることについて問いかけると, G は「10年後, 何してるのだろう」と言いながら, 同じグループのC1, C2と, イメージを話し合い, 針金や粘土を表す加工方法を試していた。(図3)



<図3 粘土などで表し方を試すG>

G : (粘土で人の形をつくりながら) 何してるところにしようかな。(C1を見る)
 C1 : (腕を伸ばして運転中にハンドルを持つ動きをして) こうなるから, 腕の位置はこの辺かな。(粘土で人の腕の位置を調節する)
 G : 車乗ってるところにするの。本当に車好きだね。C2は何してるところにするの。
 C2 : 迷ってるけど, 海外旅行に行ったところかな。
 G : あ, いいね。私もお出かけしてるところにしようかな。

Gは, 活動開始時に「何をしているところにしようかな」言っていたが, C1・C2とイメージを話した後, 「お出かけしているところを表そう」と発言しながら粘土などの表し方を試していた。

第3時, 子どもたちは自分の表したい場面を, アイデアスケッチで表した。導入で教師は, 前時の終末にロイロノートに提出された, 子どもが考えた表したい場面を全員が見られるようにアプリ上に共有し, いくつかを紹介した。その後, Gは, C1とC2と, 話しながら活動する様子が見られた。(図4)



<図4 表したい場面について交流するG>

G : (女の子の顔をかきながら) お出かけしてるところって, どうやってかけばいいんだろう。
 C2 : 私は旅行だけど, こういうポーズにするよ。(右腕を伸ばして斜め上を指さす女の子のエを見せる)
 G : (手を止め, C2を見ながら) なんで指さしてるの。
 C2 : ただ立ってるだけだと, 旅行って伝わらなそうだから, 建物とか見てる感じにする。
 G : 確かに。私も, 立ってるだけだとお出かけって分らなそうだから, スタバを持たせようかな。
 C1 : 1人でスタバ行きたいってこと。
 G : ちがうよ。じゃあ, 友達とカフェでおしゃべりしてるところにしようかな。(女の子の服装や持ち物をかき始める)(図5)

Gは、この場で、手を動かして絵に表す姿や、友達の作品を見た後、人物の周りの様子をかき足す姿が見られた。このGの姿は、「目標への情熱」を発揮した姿である。

②「あらわす・ひろげる」の過程（第4時～第1時）

第4時・第5時、子どもたちは、前時のアイデアスケッチや振り返り（図6）を基に、人物の動きを表す針金の芯をつくり、板の上に固定した。導入時に教師は、前時の終末に書いた自分自身の振り返りとアイデアスケッチを見返すよう促した。子どもたちは、本時に針金の骨組みを進めるという見通しをもった。Gは前時に、「友達とカフェで話している場面」を表したいと決めていたが、本時までの期間に、「レジンで作品をつくっている場面」を表すことに変わっていた。

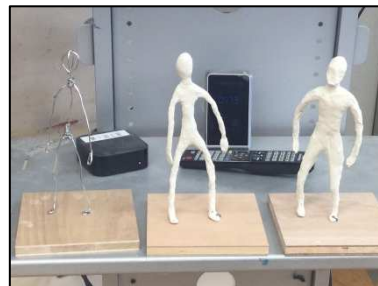


<図5 Gのアイデアスケッチ>

<ふりかえり>

今日は、アイデアスケッチを使って、いろいろな角度でかきました。次回は、つくりはじめると思うので、想像しているものと同じものができるようにがんばりたいです。

<図6 Gの振り返り>



<図7 提示した3体のモデル>

第6時、台座に固定した芯に粘土を付けていく活動に取り組んだ。授業の導入では、教師が提示した芯のみのモデル、芯に薄く粘土を付けたモデル、体の厚みを意識したモデルの鑑賞を通して、芯材に粘土を付ける際には、人体の厚さや筋肉の隆起を意識することで、より人間の体らしい形に近付くことを知った。（図7）その後、Gは、足の針金の形を調整した。調整が終わると、足の部分から粘土を付け始め、へらを用いて芯に付けた粘土の形を整えた。終末には、足から胸のあたりまで粘土を付けていた。

G：（粘土べらを使って、なぞる様に腰から臀部にかけての粘土の形を整えている）

G：ねー、体、どうやってつくるん。（自分の作品を手元で回転させながら鑑賞している）

C1：（笑顔で）知らないよ。

G：（自分の作品を鑑賞しながら）お尻がないよ。

C1：（笑顔になる）

G：ねえ、ちょっと見せて。（対面に座るC1の作品を見る）（図8）

G：（C1の作品を見終わった後、小さな塊の粘土を自分の作品の腰のあたりにつける）（図9）

Gは、芯に粘土を付けていく過程で、作品の角度を変えながら芯に粘土を付け足していた。その後、下半身の粘土の量が足りない気付いた後、C1の作品を見る姿がみられた。このGの姿は「粘り強さ」を発揮した姿である。

第7時、引き続き芯に粘土を付ける活動に取り組んだ。授業の導入には、教師が提示した子どもの作品を基に足の部位でも足首や太ももなどの太さが異なることを知った。



<図8 友達の作品を見るG>



<図9 臀部に粘土を付けるG>

その後、Gは、実際の人体構造と比較して、自分の作品の腕の芯が首の部分からつながっていることに違和感をいだいた。その際、以下のようなGの様子が見られた。

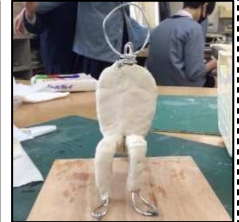
G : え、今思ったんだけど、私首から手、生えてるんだけどさ、どうやってここ（粘土の付いた胴体部分を指しながら）とつなげるん。
 C1 : (微笑む)
 G : ねえ、ちょっとおかしくなるんだけど。粘土、付けなきゃよかった。
 C1 : 首から手が生えてる。それが一番おかしいわ。
 G : あ、でもここカットしちゃって（腕の芯を指しながら）、やっぱ粘土だけで手つくろう。そしたら垂れちゃうかな。
 C1 : (腕をだらんと垂らして笑う)
 G : あ、でもテーブルに手、置くからぺらんってなんないか。
 (図 10)
 C1 : ぺらん？こう？（手を前に突き出す）
 G : まあ、いいや（教室中央の用具置き場にペンチを取りに行く）、カットします。
 C2 : え、カットするの？
 C1 : ふにやふにやになるよ
 G : 大丈夫。テーブルに手を置くから。（ペンチで右腕の芯材を切断する）(図 11)



＜図10 表したいポーズを友達に伝えるG＞



＜図11 腕の芯を切断するG＞



＜図12 Gの振り返り画像＞

G は、自分の作品と、教師が導入で提示した参考作品や友達の作品とを比較し、人体構造の不自然さに気付き、芯を切断することで腕の接合位置を変えた。この姿は、針金の形から人物の動きを変えることなどを行い続けるという「目標への情熱」が発揮された姿である。

第8時、第9時は、引き続き針金に粘土を付けていった。導入において、教師は、前時の終末に書いた自分自身の振り返りを見返すよう促した。G は、自分の振り返りを見直し、C1 や C2 と話しながら、本時の活動の見通しをもっていた。(図 12)

G : (自分の振り返りをC1とC2に見せながら) 見て。腕がない。
 C2 : あ、そうだ。腕ザーンって切ってたよね。
 G : そうそう。あとお尻もない。
 C1 : (Gの振り返りを見ながら) 本当だ。
 G : (前回の振り返りに腕とお尻をかき足す) こんな感じかな。

その後、以下のような様子が見られた。

G : (話をせず一人で作品の角度を変えながら、粘土を付けていく。)
 (数分後) どうやってお尻付けるの。縦長にしかない。
 C2 : 椅子に座るから、おしりの位置が違うんじゃない。
 G : そっか。じゃあC1の(作品)を見て、真似しよう。(C1の作品を引き寄せ、自分の作品を並べて見る。C1の作品を隣に置いたまま、自分の作品に粘土を付けていく。)

この場面では、黙々と粘土の動きを変える姿があり、「目標への情熱」が発揮されたといえる。また、手を止めて、C1 の作品をじっくりと見て、粘土の付け方を参考にする姿から、「粘り強さ」も発揮された姿といえる。

臀部の形ができた後、G は粘土で腕をつけ始めた。

G : (肩の部分に粘土を足し、作品を回転してごすりつけながら厚みを出していく) ねえ、腕が付かないんだけど。(Gと同様、座って手を伸ばす動きを表すC1の作品を見る)
 C2 : だからテーブルを先につくればいいじゃん。
 G : でも腕つくってからじゃないと。(肩に粘土を付け、厚みが出てきたところで) いい感じじゃない。(作品を持ち上げてC2に見せる。)
 C2 : (作品を見て、うなずく)
 G : (様々な角度から作品を見て、微調整をする) (図 13)



＜図13 作品を様々な角度から見て粘土を付けるGの様子＞

<ふりかえり>

今日は、たくさん工夫しながら、完成に近づけました。工夫したことは、うでにはりがねをつけていないので、かたのところたくさんあつみをつけました。また、つくえにはりがねがないので、ひざと木の板でつくえのまん中を支えました。今回は、かためられたらせいこうなので、次回は、つくってる物のざいりょうをねんどでつくって、机の上ののせて、いすもつくってかんせいに近づけていきたいです。



<図14 Gの振り返り>

Gは、黙々と粘土の動きを変え、加工後に自分の作品を様々な角度から注視する姿があった。この姿は、「目標への情熱」が発揮された姿と言える。また、この場面では、GがC1の作品を注視している姿が見られた。この姿は「粘り強さ」が発揮されたと言える。

第10時、第11時は、粘土を付け終え、色を付けたり人物の周りの様子を表したりした。導入で教師は、前時の終末に書いた自分自身の振り返りを見るよう促した。Gは自分の振り返りを見ながら、前時に粘土で座っている人物の動きができたことと、本時では色を付けていくことを、C1とC2と話していた。その後、色づくりや色の組合せを確認しながら、作品を様々な角度から見て、黙々と絵の具で色を付けていった。(図15)



<図15 黙々と絵の具で色を付けるGの様子>

③「ふりかえる」の過程(第12時)

第12時には、完成した作品を全体で見合った。互いの作品を様々な角度から見て、よさや工夫を見付け、友達にロイロノート上でコメントを送っていた。

これまでの学習を通して G は、本校図画工作科が想定した「目標への情熱」や「粘り強さ」の非認知的能力を発揮していた。「目標への情熱」を発揮した姿として、表したい場面の人物の動きに合わせて、針金や粘土の形を何度も変える、他者と話さず黙々と活動する、という様子が見られた。また「粘り強さ」を発揮した姿として、友達作品や活動を見る、自他の作品を比べる、様々な角度から作品をじっくりと見る、という様子が見られた。このように、「目標への情熱」と「粘り強さ」が発揮されることで、自分の将来の夢や願いとして表したい場面を、人物の動きや周りの様子まで具体的にイメージしながら活動を行っていた。これにより、自分にとっての意味や価値をつくりだすことができていたため、図画工作科を学ぶ本質的意義に迫れていたと言える。

題材を通して、「目標への情熱」や「粘り強さ」を発揮した姿が現れた要因については、学びのデザインが学びのプロセスにつながったためであると考えられる。題材の導入で、表したい場面が思い付かなかった G であったが、「対象や事象へのイメージを共有する機会」によって、C1の活動や、C2の発言から想像を広げ、「お出かけ」という場面を表すことを決めることができた。その後、C1やC2とイメージについて話したり、提出された学級全体のイメージを参考にしたりしたことで、造形的な課題を自分事として捉え、イメージした未来の自分像と今の自分が興味のあることを結び付け、「レジンで作品をつくる姿」を表すことに決めていた。

また、「気付いたことや次時に取り組みたいことを記録する機会」の設定により、一単位時間の活動で、造形的な課題の達成に近付けられたことを自覚し、次時に取り組みたいことの見通しをもつことができた。さらに、一単位時間の導入時にも、前時の振り返りを確認することで、現段階での達成具合や達成に向けて不足していることを自覚したり、自己の活動を見通したりすることができた。

「互いの造形活動を自由に見合える環境」では、Gが表したい場面と、目の前の座席のC1が表したい場面における、人物の動きが似ていたため、作品や活動を見ながら、自分の作品や活動に生かすことができていた。これにより、「他者と関わろうとする意識の高まり」というプロセスも実現できていた。以上のことから、本題材における学びのプロセスは有効であったと言える。

5 成果と課題

本校図画工作科における問題解決的な学習の中で、共によりよい生活を創造する子どもの育成に向けて、「目標への情熱」と「粘り強さ」を発揮する姿が現れるための学びのプロセスと、そのプロセスを生み出す学びのデザインについて研究を進めてきた。その結果、次のような成果と課題が明らかになった。

○成果

子どもたちが図画工作科の学習に取り組む中で、活動に黙々と取り組むことや自分の作品や活動を注視しながら、作品や活動をつくり続けるという「目標への情熱」が発揮した姿が見られた。これは、「対象や事象へのイメージを共有する機会」や、「気付いたことや次時に取り組みたいことを記録する機会」により、対象や事象と関わることへの期待が高まったためだと考える。

また、活動がとまった後に、他者の作品や活動を覗き込む姿、自他の作品や活動のよさや美しさに関する発言をするという「粘り強さ」が発揮された姿が見られた。これは、「互いの造形活動を自由に見合える環境」の設定により、自分の作品や活動をよりよくするために、他者と関わろうとする意識が高まったためだと考える。

○課題

「互いの造形活動を自由に見合える環境」の設定は、全ての子どもが見に行くことを担保していなかった。その為、学びの実際には、適宜、教師が活動を見合うよう全体の声がけを行ったが、造形活動に没頭している子どもは、出歩いて別グループの作品や活動を見合うことはなかった。今後は、他者の作品や活動のよさや美しさに気付かせるための工夫が必要である。

【参考文献】

- ・福田隆真，福本謹市，茂木一司，【編集】『美術科教育の基礎知識』，建帛社，2010年。
- ・鹿毛雅治，『モチベーションの心理学「やる気」と「意欲」のメカニズム』，中央公論新社，2022年。
- ・奥村高明，有元典文，阿部慶賀，【編集】『コミュニティ・オブ・クリエイティビティ』，日本文教出版，2022年。